

乳児保育Ⅱにおける Name tag creation の中で 見えてくる学生の姿 — 教育成果（保育観の形成）からの一考察 —

谷川 友美 米持 広美

The Image of Students in Name Tag Creation in Infant Care II:
A Study from the Educational Results (Formation of the Childcare Perspective)

Tomomi TANIGAWA Hiromi YONEMOCHI

【要 旨】

本研究の目的は、科目「乳児保育Ⅱ」において実施した Name tag creation が、どのような意図をもって学生の保育観の形成に役立っているのか、そのプロセスの記録の中で見えてくるものを明らかにすることであった。対象は、O 県の A 保育者養成校の学生 141 名、期間は 2019 年 11 月～2020 年 1 月であった。研究方法は、半構成的面接と記録物を現象学的アプローチで質的に分析した。アンケート調査は量的に分析した。研究の結果、学生は Name tag creation の過程において「乳児を優しくケアする保育者の雰囲気」「未熟な乳児あどけなさや純粋性」を表現し、乳児の有り様／立場／特性等を想像している姿が明らかになった。さらに学生は、Name tag を教育的視点で関わるツールの一つとして捉える側面を見出していた。今後の課題は、学生自ら乳児観や保育観を意識化できる教育方法論を模索していくことである。

【キーワード】

保育観、乳児観、学生

【Abstract】

The purpose of this research was to clarify whether the Name tag creation in “Infant Childcare II” is useful for the formation of students’ views on childcare, and what can be seen in the process. The subjects were 141 students from A nursery teacher training school in O Prefecture, and the period was from November 2019 to January 2020. Semi-structured interviews and recordings were qualitatively analyzed using a phenomenological approach. The questionnaire survey was analyzed quantitatively. As a result of the research, the students expressed “atmosphere of caregivers who take care of infants gently” and “innocence and purity of immature infants” in the process of creating Name tags. It became clear that they are imagining the infant’s state/position/characteristics.

Students regarded the Name tag as one of the educational tools. A future task is to explore educational relationships that enable students to become conscious of their own views on infants and childcare.

1. はじめに

先行研究レビューにおいて、保育士養成校で学ぶ学生の保育観や倫理観は、実習経験を経ると変容しやすいと結論付けた研究は多く散見される。谷川¹⁾は、最も学生らが保育の倫理観が育つのは、現場体験実習をいかに意味付けできるか、その意味付けに教育者は寄り添い言語化できるような教育的関わりが重要だと述べている。松永²⁾は、学生らは、実習前は「かわいい」「母親がわり」など情緒的で理想化された保育士観や子ども観を持っているものが多いが、実習後には「個性」「有能性」というようにイメージを変化させたことを報告している。彼らは保育者効力観という言葉を使用し、実習経験が学生の保育者としての自覚や自信を高めていく事を明らかにしている。一方、中村³⁾は、実習経験が保育者効力観を高める効果を見いだせなかったことを明らかにしている。堀⁴⁾は、保育者効力観の高い学生とそうでない学生では「子ども観や保育者観」を現す言葉に違いがあると述べている。河村⁵⁾は、幼稚園教諭は、保育者としての喜びや、やりがいを感じているものの、担任クラスの幼児に強い責任を感じているものや、より良い保育方法を身に付けることを重要だと考えているものが多いことを明らかにしていた。さらに、幼稚園教諭と保育士資格の資格・免許の取得を希望する学生は、「明るく元気な子ども」との間に「信頼感を持つこと」が大切だという価値観が強く、小学校教諭免許と幼稚園教諭免許を併せて取得を希望する学生は、「(教育者に対して)指導を素直に聞く態度」を求め、「指導書を参考」にして継続的に保育を進めることが大切であるという価値観が強いという興味深い研究も存在した。

保育者の保育観についての先行研究で、佐

藤⁶⁾は、保育実践は様々な事象が複雑に存在しており、子どもの「望ましい変化」を考えるだけでは保育が立ち行かないという現実があり個人の能力不足として、これは保育者効力観という側面から保育観を明らかにする際の限界であることも考えられていると述べている。このことは、保育者も保育者養成校で学ぶ学生についても同様に、学生にも保育者効力観では明らかにすることが困難な「保育観」も存在するのではないかと考えられる。

このようなことから、保育者へと行って行く学生の「乳児観」や「保育観」を具体的・多面的に検討することは、保育者養成の段階において意義が高いといえる。本研究者は、保育士養成校を卒業した保育者対象の保育観や倫理観を形成していく卒後教育にも力を注ぐ重要性は理解しつつ、養成校から教育課程全体を見直しながら乳児観や保育観をアップデートできる継続的な基礎教育が必要であると考えた。

そこで、本研究の目的は、科目「乳児保育Ⅱ」の中で実施する、Name tag creationの試みにおいて、学生の価値観(倫理観)に焦点をあて、乳児観や保育観の形成及び教育的課題について明確にすることとした。

2. 研究方法

(1) 対象者

O県にあるA保育士養成校に通う学生のうち乳児保育Ⅱを履修しているもの211名

(2) 質問紙調査

Eラーニングシステムを活用し、Name tag creationのプロセスにおいて大切にしていることを調査した。質問項目については、乳児保育Ⅱの担当者3名の教員で協議し作成した。対象者に対し、研究の目的・方法・倫理的配慮など

についての説明を行い、研究協力を依頼した。質問紙調査の実施期間は2019年10月～2020年1月までとした。

(3) 学習課題（レポート）に基づいた半構成的面接

乳児保育Ⅱの授業は、全15回で実施され内3回を Name tag creation の授業とした。その3コマの中で学生に対し半構成的面接を計画した。半構成的面接の協力を承諾する学生には、面接協力者連絡用紙に記入してもらい、研究者へ直接返送するよう依頼した。返送された連絡用紙に沿って、インタビュー協力希望者にアクセスし、参加承諾の得られた学生に対し、半構成的面接を行った。開始前に、再度研究参加の任意性、中止・拒否が可能であることなどを説明した。面接内容を参加者の承諾を得たうえで、ボイスレコーダーに録音し、個人を特定する情報を匿名化した後に逐語録を作成した。逐語録は質問紙の内容と照らし合わせながら、その意味を明確化することと、新たに語られた体験に関しては現象学的解釈学アプローチを用いて分析し、倫理的実践の蓄積の一部とした。

本研究では、対象者に Name tag creation のプロセスの中で「乳児ないし乳児保育」について語ってもらった。Name tag に纏わるエピソードやその Name tag の形や色になった考えを、研究者が対象者に問いかけながら、明らかにするという手法を取った。何かの作品を制作する際、作品はその作り手の概念や価値観の表現とし、対象者自身の認知や発見、感情、時にはストレスまでも含むものと捉えて研究を遂行した。

Name tag とそのプロセスについてをデータに基づく研究は、小児の研究領域に当たり数多くみられている。本研究は特に、Name tag は言語表現と比較し、青年期前期の段階の人間の発達段階による表現力に差がない点、また対象者が認識している象徴そのものをわかりやすく直接的に表現できる点が重んじられる。Name tag から研究対象者及び研究結果を読む他者がどのように分析して結果を出すのか、その足跡

を辿りながら結果を導き共有することそのものが、本研究の信頼性の確立に繋がると考える。

本研究は、乳児保育Ⅱを受講した学生を対象に、Name tag creation のプロセスの中で乳児または乳児保育について話をする場面を記録した。研究者がその Name tag について話ができる際は、レコーダーを片手に参加観察法で行った。レコーダーが気になり、本来の学生の様子が見うけられない場面があったため、そのケースはレコーダーでの録音を中止した。

分析や解釈に当たっては、対象者の正確な「学習している世界」を探るため面接で得られた言葉のデータだけでなく、レコーダー録音や参加観察で記録された行為や沈黙、対象者とのセッション中の観察した様子全てを Benner⁷⁾ が提唱している解釈学的現象学を基盤とした3つのアプローチに沿って、分析・解釈した。時折あたえられた事柄を意味として現れた純粋な現象として提示し、その現象の普遍的な特徴を記述し、体験の意味を理解することを目的としている。具体的なデータ分析は以下の手順で行った。

- 1) 対象者と話をした乳児または乳児保育に関する概念に関して、注意をひく点、研究者や対象者が感じたり考えたりした点をメモに書き留める。参加観察した事柄もその時々書き留めメモを作成した。
- 2) 制作された作品と1)を付け併せ、全体を通して改めて丹念に再考する。
- 3) 1)と2)の内容を含め、経験の移り変わりや変化の単位を明らかにした。
- 4) 3)の中で同じ状況について語られている部分、それに付随するシンボルとなるキーワードや事柄や感情の表現を一つの構成要素とし、その状況を対象者がどのように意味付けているのか把握した。
- 5) 対象者の実際の制作された作品と言葉を

研究者の言葉や概念に置き換えながら構成要素ごとに記述を行った。

- 6) 各構成要素を経時的・感情の流れに沿って並べ、対象者の世界を一つのストーリーとしてまとめた。
- 7) 記述を繰り返し読み、対象者の世界を研究者が解釈し、中心となる意味を見出した。
- 8) 対象者の制作された作品と記述から現象の全体構造を統合し共通する意味を類似化した。

なお、本研究は、対象である学生が捉える乳児または乳児保育を客観的な現実（外部からの観察可能な世界）ではなく、あくまでも対象者の主観的な現実（内部者の視点）から明らかにしようとするものである。研究者は全てのメモ及び解釈を統合して、「学生の主観的な現実に入り、対象者の考えと認識、その環境の中で生きている者の見方を探る」という立場をとる。また、研究者が「語ること」やスーパーバイザーが「問い直す」という時間を設け、研究者の視点の対象化に努めた。視点の対象化とは、研究者がスーパーバイザーに「分析過程を示し解釈を語ること」によって「思い込み」や「とらわれ」に気づくことをいう。また、現象学的研究の経験のある研究者1名と看護教育に携わる分野の研究者1名に研究者が再構成した体験の記述・解釈を提示し、研究者の解釈が妥当であるかを確認し真実性を高める努力をした⁸⁾。これは事象を捉える際、認識の仕方をどう考えるかという認識論が基盤になっている。

半構成的面接は2019年11月～2020年1月の期間に実施した。

(4) 教員のグループミーティング

乳児保育Ⅱは、担当者3名の教員で5クラス211名（Aクラス31名、Bクラス45名、Cクラス45名、Dクラス45名、Eクラス45名）で実施

している。毎月2～3回定例でグループミーティングを授業の進捗状況の報告や情報交換から課題の明確化等の目的で実施した。グループミーティングの中で、明確になった問題は解決に向けてその都度協議して取り組みに反映させた。

3. 倫理的配慮

対象者へ研究内容の説明を行い、参加は任意であることを伝えた。研究参加に賛同を得られた学生のための調査として、途中で辞退することも可能としている。作品を制作することや参加観察や作品を示した質問の時間は中断されることも視野に入れ研究を進めた。途中でレコーダーの録音は意識しすぎる場面があったため、急遽中止参加観察での観察ノートを記録した。フォローアップとして研究者の連絡先を研究対象者に伝え、心配や相談がある時はいつでも連絡をくれるように口頭でも再確認したが、現時点まで連絡は受けていない。尚、守秘義務を厳守するためにも、研究発表及び論文に明記されているものは、個人を特定できないような表記にしている。また、学生らの作品の掲載許可は得られている。

4. 結果

結果は、(1) 学習課題に基づいた半構成的面接、(2) 質問紙調査、(3) 教員のグループミーティングの順で示していく。

(1) 学習課題に基づいた半構成的面接

半構成的面接の分析の結果、「新型コロナウイルス感染症対策の重要性（防水加工・洗濯可能な対応等）」「キャラクターの世界の投影」「安全対策」「配色の効果や迷い」「自己紹介（自分表現）」「名前の表記の配慮」の6つカテゴリーが抽出できた。各カテゴリーで主に聴取できた意見等をまとめると次のようになる。

1) 「新型コロナウイルス感染症対策の重要性」

多くの学生が、汚れても洗える工夫をする必要があると考えて制作する作品の素材を意識していた。様々な感染症対策として、ウイルス付着を除去できる素材や工夫は無いか語られた。携帯電話の防水カバーのように本来作成した作品を覆う形はどうかなど話合いをする学生もいた。勿論アルコール消毒や洗濯を何度も実施しても傷みが少ないかにも気を付けている語りもあった。中にはフェルトの2次加工できる素材を活用することで、現在作成しているフェルトに付着した細菌やウイルスもコーティングができ安全であると考え素材を選択する学生も少数いたが、多くの学生は洗えるフェルトを購入していた。

2) 「キャラクター等の世界の投影」

「だるまさんがころんだ」というキャラクターの不思議さや面白さを表現する学生がおり、選択理由としてキャラクターが性を超えた不思議な存在感であることが語られた。また、「マイメロディー」のキャラクターを真似し制作する学生がおり、地元銀行のキャラクターとしているため、多くの子どもたちはおそらくどこかで見たことがある身近な存在ではないかと考えたり、ネコなのかうさぎなのか子どもにとっては面白いクイズにもつながるのではないかという意図を踏まえキャラクターを全面に出したと語る学生もいた。また魚をテーマとして制作される学生は、子どもの絵本や生活の中でよく出てきて、聞き覚えが多い単語であるかと同時に食べ物にすることで食育にもつながっていったらという考えがあった。多くの学生は、動物や食べ物を表現することで、子どもたちと会話が増えることをねらっていた。特に、特定のキャラクターや固有名詞を使用せず、抽象的な形で色々なものに見えるのも面白さがあると考える学生も少数いた。▽(三角)や○(丸)などはその代表例で、いろんなことに見立てることも可能である。想像力や創像力も掻き立てられるのではないかと考え、乳児に適していると理由付けをしていた。

3) 「安全対策」

乳児なので抱きかかえる際やハイハイやものを口に入れる特性を踏まえるなど、安全性を重要視する学生もおり、安全ピンは使用せず、挟むタイプのクリップやマジックテープを使用したものを選択したり、ボタンの縫い付けを徹底して誤飲防止に努めたいという意思が現れる作品もあった。エプロンに縫い付けてしまうName tag作成を考案し、エプロンを洗濯する都度、一緒にName tagも洗えるので清潔に保たれると考える学生は、エプロンの数だけ、Name tagを作る必要があるが、色々なName tagを見せることで、子どもたちは日ごとに代わる名前に気づいてくれると嬉しいという思いで、何個もName tagを作成していた。また、作成したName tagの表面にビニール加工を施す。そうすることで、すべての消耗品(目玉や頬っぺたのアップリケ等)が落ちない防護を考えている学生もいた。

4) 「配色の効果や迷い」

乳児の発育を考慮して、素材の色を赤、白、黒といった目に入りやすいコントラストがはっきりしたものを選択する学生がいる中で、色を原色にした方がよいのか、好きな色を選ぶか、どうした方がよいのか、どう思われたいのかを、考え困惑する学生も多かった。乳児の視力はどの程度か調べてみたり色の組み合わせを考えながら、乳児から自分の見られ方(評価)を重要視する自分自身の視点に気付く学生もいた。

5) 「自分表現(自己紹介)」

乳児のことを考えるより、学生自らが好きな色やキャラクターやデザインを表し、雰囲気を感じてもらえるよう、自己紹介の意味を込めている学生もいた。一旦は子どもファーストを考えるも、ただ自分が好きなキャラクターに反応する子どもがいたら気が合い盛り上がるができると考えている学生も存在した。

6) 「名前の表記の配慮」

学生は、乳児はまだ文字が理解できていないと思っているが、中には幼児の中にひらがなにすることで読める人がいるかもしれないという期待を持っている。文字というものに関心を持ったり、Name tag から話題が広がる可能性があると考え、子どもが最初に見る字という観点で、丸みや太さなどどんな字の形に作り上げるか悩む学生もいた。Name tag の文字が刺激になり、言葉の発語につながることをねらう学生の語りも聞かれた。

「新型コロナウイルス感染症対策の重要性（防水加工・洗濯可能な対応等）」「キャラクターの世界の投影」「安全対策」「配色の効果や迷い」「自己紹介（自分表現）」「名前の表記の配慮」の6つカテゴリーが抽出できたが、学生らはこの6つすべてのカテゴリーの中で、時に「乳児をやさしくケアする保育者の存在」を語る場面や、「保育者のやさしくケアする雰囲気」を理想に掲げ、自分自身もそうありたいと語る場面が確認できた。また「キャラクターの世界の投影」「安全対策」「配色の効果や迷い」「名前の表記の配慮」のカテゴリーの中では、「未熟な乳児のあどけなさや純粋性」をName tag に表現していこうとする姿や考えが明らかになった。

「乳児をやさしくケアする保育者の存在」「保育者のやさしくケアする雰囲気」「未熟な乳児のあどけなさや純粋性」を、学生自身の言葉やName tag で表現する場面が多く見受けられた。学生自身が、自分が乳児であったら「この色が見やすい」などといった語りも多く聞かれ、乳児の立場に自分の身を置き換え、想像する場面や姿も確認できた。

(2) 質問紙調査

学生のアンケート調査結果には、安全面を非常に考慮して作成する学生が75名（53.2%）、安全面を工夫したり考えたりはしている学生は60名（42.5%）であった（図1）。また、衛生面を非常に考慮して作成する学生が61名（43.3%）、工夫をしたり考えたりはしている学生は67名（47.5%）であった（図2）。安全

面や衛生面よりもデザイン等を優先した学生は1割以下であった（図1、図2）。

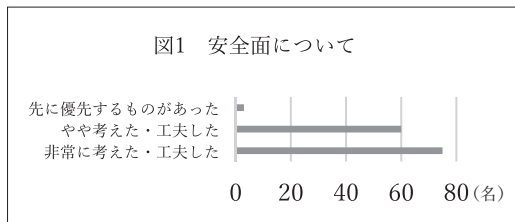


図1 安全面について

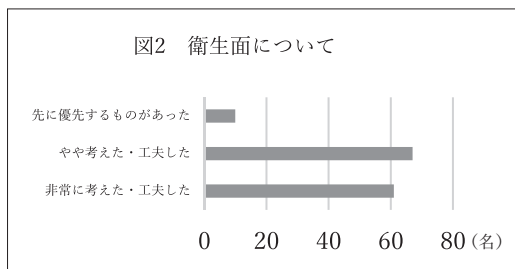


図2 衛生面について

子どもの感受性に合わせたデザインを非常に考えたり工夫したりした学生は、80名（56.7%）で考えたり工夫した学生は54名（38.3%）であった（図3）。また、色の配色に非常に気を配り考えた学生は、65名（46.1%）であった。やや考え工夫した学生は63名（44.7%）、あまり考えなかった学生は8名（5.7%）であった（図4）。

実習後、Name tag を介して子どもと交流が持てたか否かについて尋ねたところ、45名中43名が取れたと回答していた（図5）。また乳児保育ⅡにおいてName tag creation の授業内容について「良かった」と回答している学生が63人中62名おり、1名は「わからない」と回答していた（図6）。

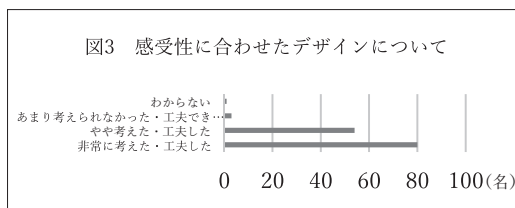


図3 感受性に合わせたデザインについて

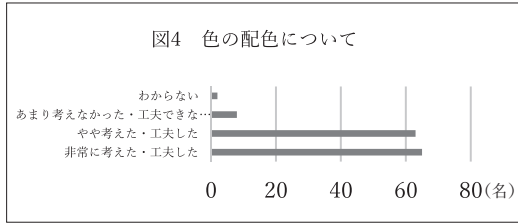


図4 色の配色について

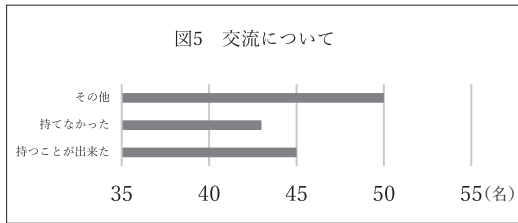


図5 交流について

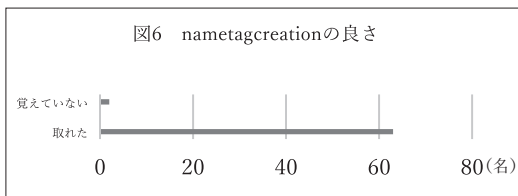


図6 Name tag の (作成経験) の良さ

(3) 教員のグループミーティング

A 保育士養成校において、科目「乳児保育Ⅱ」の履修学生数はここ数年140～170名で推移しており、例年3～4名の教員で担当している。2019年度は3名の教員で担当した。Name tag creation の試みは、2年目となる。教員の専門分野は、家政学の専門家(教員免許取得者)と看護師(看護師免許取得者)となっている。

Name tag creation を授業の中に組み入れる際、授業のねらいを何にするか協議したところ、担当教員の専門分野の違いや指導経験の違いにより得意な分野や指導方法が異なっており、統一した見解を持つことが困難であった。2019年度11月ころまでは、専門分野の基礎的概念の違いをお互いに受け入れていくことに努めた期間であった。教員間のミーティングは毎週実施され、得意な分野や作成した資料は、授業を進めていく過程で共有するようになった。

グループミーティングは、学生の学習の進捗状況などの情報共有と同時に、どのような教育方法が保育倫理観を高めるのかなどを話し合った。その結果、得意なことや作成した資料を共有でき、互いに活用できる部分は協力しあい授業運営を進めた。具体的な例としては、レポートの提出方法や手順の示し方などである(図7～10)。また、Name tag creation を15コマの授業の中で3コマを使用し、その授業時間内で完成できない場合は、授業時間外学習の時間で完成することで3名の教員の授業の進捗状況を揃えるようにした。



図7 Name tag の作品 (表)



図8 Name tag の作品 (裏)

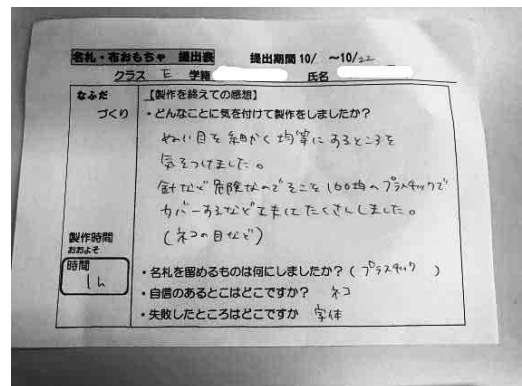


図9 提出票

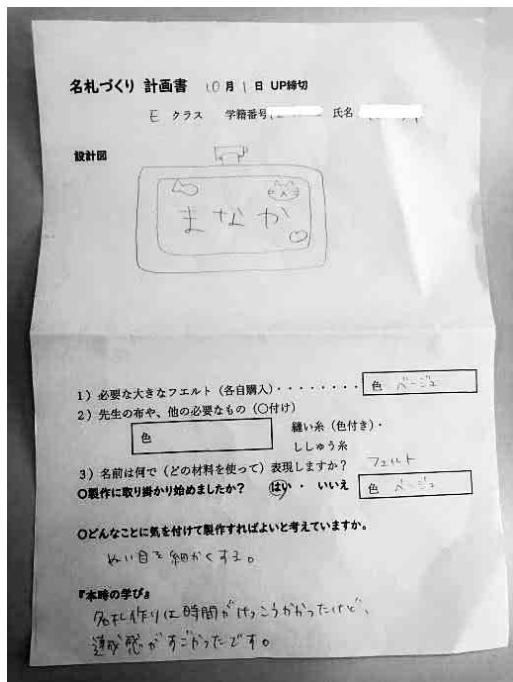


図10 計画書

5. 考察

(1) 保育の理想や目指す姿・子どもへの想い・保育観の形成について

質問紙調査では、安全面・衛生面を非常に考慮して作成する学生が多く、半数以上を占めた。「乳児保育Ⅱ」の科目担当者3名のうち2名が看護学を専攻している教員である。看護学では、乳児に対し最善の利益を提供する概念の中に、健康が増進することや健康が損なわれないような危険回避などが重要であるため、教育の中で自然と「安全面」や「衛生面」の配慮を口にすることが多い。よって、このような教員の専門分野の現状が少なからず影響したのではないかと考察できる。また、安全に子どもを預かる際に、生命を守る基本的な技術として「衛生的」で「安全な」保育環境を準備することが重要であると考えているのではないかと考えられた。

子どもの感受性に着目して、デザインや配色を考えたり工夫したりする学生は、80名

(56.7%)で考えたり工夫した学生は54名(38.3%)であった。また、色の配色に非常に気を配り考えた学生は、65名(46.1%)であった。やや考え工夫した学生は63名(44.7%)、あまり考えなかった学生は8名(5.7%)であった。半構成的面接におけるカテゴリー「配色の効果や迷い」では、乳児の視点はどんなものなのか考えて色をセレクトした学生も多かった。乳児の色彩感覚などにも配慮しなければならないと考え、調べ学習をした結果、配色を考慮した意見も聞かれた。また、半構成的面接におけるカテゴリー「自分表現(自己紹介)」では、乳児の視点ではなく学生自らの視点を全面に出しながらコミュニケーションを図りたいという思いを込めたデザインや配色を考えている学生も多く存在することが明らかになった。これらから、学生は特に乳児の視点を持つと努めたり、時に乳児とのやり取りができるのではないかと想像したり、Name tagが会話の契機となりえるか等といった相互作用の期待を込めて、思考を巡らしているのではないかと考察できた。また、学生の語りでは、乳児を担当する保育者に対し「乳児を優しくケアする者の雰囲気(イメージ)」を思い描き、乳児に対し「未熟な子どものあどけなさや純粋性」を持つ存在とし捉えていた。

学生は、原色を使用することで乳児にとって刺激的で魅力のあるName tagになるよう、赤や白や黒といったコントラストのある色の組み合わせも考えてデザインしていた。使い古したクリアファイルを覗き、視力が0.1以下の状態を時に確認しName tagを作成する様子は、乳児の視点になろうと試みる姿としても映し出された。これらから、学生らは乳児の立場を想像し、色やデザインから乳児の感受性を刺激できるようにと工夫したり思考したりする姿も露になったと考察できた。

授業時間数として、15コマある「乳児保育Ⅱ」であるが、そのうち3コマをName tag creationに費やした。実習後、ネームを介して子どもと交流が持てたか否かについて尋ねたところ、45名中43名が取れたと回答していたことや、

Name tag creation の授業内容についてほぼ全員が「良かった」と回答した。このことから、Name tag creation に長い時間をかけたが、学生らは前後の授業とも関連させながら子どもへ思いをはせる時間、子どもの見方を想像する時間、子どもとのやりとりをイメージする時間につながり、自ら考える保育の有り様を想像できる時間となったと考えられ、かつ学生はその時間が「良い」ものだと意識付けられていた。

厚生労働省子ども家庭局保育科によれば、2021年4月現在の待機児童は5,634人⁹⁾、調査を開始して以来最小となっている。今後も待機児童は減り続ける見込みで、2025年には保育所利用児童数はピークを迎え、それ以降保育所利用児童数は横ばいか、減少に転じることが予測されている。待機児童による保育定数確保から、人口減少に伴う保育の在り方に焦点を合わせ、不適切な保育の未然防止等、いよいよ「保育の質」が本格的に問われる時代になってきたと考えられる。不適切な保育とは、「保育所での保育士等による子どもへの関わりについて保育所保育指針に示す子どもの人権・人格の尊重の観点に照らし、改善を要すると判断される行為」¹⁰⁾とされる。その背景には「保育士の認識」と「職場環境」があるのではないかと予測すると、保育士の倫理観や子ども観の養成校の基礎教育の時点で、成長をどう支えていくかが重要課題といえるだろう。保育士が子どもの人権や人格の尊重を踏まえた関わりを十分理解しているかは重要な問題といえる。谷川¹¹⁾は、「保育実践の根底には、こどもの人間としての尊厳を守り、よりよい保育を提供するという、倫理への問いかけが不可欠である。また日常の保育実践の中に、内在している倫理的問題を、敏感に感じ取り、適切に対応することは、保育士の責務であり、同時に自らの専門職としての基盤の確立につながる。そのためには、いかに保育士の倫理的感受性を高め、倫理的視点を育むかといった議論が必要となるといえる」と述べている。野島らは¹²⁾¹³⁾、「(保育者らは現場で、)日常の保育の中の問題に直面するも、倫理的な問題というよりもむしろ保育士個人の知識不足や技

術など能力の問題、組織の運営上の問題、あるいは個々の人間関係の問題として捉えられ、保育現場における倫理そのものについての十分な検討がなされていない」と指摘している。これらから、学生の基礎教育の中でも、様々な問題を提示し、保育者個人の問題とみならずだけでなく、施設の組織の問題とするなど倫理的視点で分析する力の教育が必要に関連することかと思われる。倫理教育は、保育の質の向上につながることは自明なことである。卒後教育もさることながら養成校における基礎教育の時点から、倫理教育を始める重要性は高いのではなからうか。

また、学生らのように、時に乳児の立場になって物を見たり考えたりする時間が十分あり、対象者(乳児)の存在を受け止め、そして受け入れながら活動していく、このような姿や思考は保育者になっても失わないでいてもらいたい。なぜなら、例えば、何か問題が起きた時、そのような視点や姿や思考を持ち続けることで、目の前の問題を捉える視点が多角的に看ることに繋がり、さらに倫理的観点を踏まえて分析的に対応できるからである。

保育者の倫理教育につなげていく足掛かりとして、乳児観や保育観を基礎とし、乳児保育の意義や倫理についても、意識化できる教育的支援を授業の中で組み入れていく事は重要かと考えられる。

(2) 新型コロナウイルス感染症の影響

日ごろの生活から手洗いやうがいの遂行、マスク着用、三密の回避などに心がけ生活しているため、感染症予防の意識が高い状況での授業実施であった。よって、半構成的面接の中でも一番多い意見として、消毒や洗濯などができるフェルト加工等を使用するといった工夫する視点が多く確認できた。乳児の特徴の一つに免疫機能がまだ未熟であり幼児や学童よりも易感染状態であることは予測でき、Name tag creation の時間もその予測をもとに、様々な思考を巡らし実施していたかと考えられた。世界中でこれほど感染対策を徹底したことは、経験したこと

がなかったことだが、これを契機に日々の対策を実践しながらそれをいかした Name tag creation となったように思われる。

(3) 今後の課題

3人の教員で共通していたのが、個人のレポートを課し、学びを振り返り工夫点や意図などを記載させていた。それぞれのレポートは活字なので、表現力のない学生は深く学びが得られていないような表記にはなるが、半構成的面接をしてコミュニケーションの中で真意を探ると、思いつかないような発想をしていたり、生活の知恵と工夫を持って Name tag creation に取り組んでいた。学びの振り返りは、個人の課題レポートだけで終結するスタイルを保持していたために、広がりや深化が図られずにした。よって、今後はグループワーク等を取り入れ学びの共有をしたり、活字のみの学びのレポートを課すことのみで評価するのではなく、様々な方法を組み込みながら学生たちの成長を見える形に残す工夫が必要と考えられた。学生の学びをより深化させて、乳児観や保育観に焦点を絞り、学生自ら考える機会を持つことは必要だと思われる。更に、倫理的実践とは何か、乳児保育の意義についても思考していく場面を設定する教育的工夫も重要かと考えられる。

また、Name tag creation は、学生の実習の時期に合わせて取り組むのがのぞましいが、「乳児保育Ⅱ」において取り組むのがベストかについての協議は行ってこなかった。カリキュラムポリシーの則り、教務委員とも協議しながら A 保育士養成校にとっての最適な時期や科目についても再検討が必要と考えられた。

6. 結語

本研究は、科目「乳児保育Ⅱ」において実施した Name tag creation が、どのような意図をもって学生の保育観の形成に役立っているのか、そのプロセスの記録の中で見えてくるものを明らかにすることを目的とした。対象である学生らは、Name tag creation の過程において

「乳児を優しくケアする保育者の雰囲気」「未熟な乳児あどけなさや純粋性」を表現していた。また、乳児の有り様を想像したり、時に乳児の立場に自分の身を置き換えたりして、取り組む姿が確認できた。新型コロナウイルス感染症対策でより乳児の易感染である特性をも考慮し思考をめぐらしている姿も確認できた。さらに学生は、Name tag を教育的視点で関わるツールとして捉えていた。今後は、学生自ら乳児観や保育観を意識化できるような関わりや工夫などを含めた教育方法論を模索していく必要がある。

引用文献)

- 1) 谷川友美、保育を学ぶ学生の倫理教育に関する研究—道徳的推論および道徳的発達段階の調査より—、別府大学短期大学部紀要、2011年、第30号、p35-46.
- 2) 松永しのぶ、保育実習が学生の子ども観、保育士観におよぼす影響、鎌倉女子大学紀要、2002、9巻、3号、p23-33.
- 3) 中村涼、保育者を目指す学生の社会的スキルと保育者効力感の関連。
https://www.jstage.jst.go.jp/article/pamjaep/53/0/53_228/_pdf/-char/ja
- 4) 堀正嗣、保育者の保育観と職業観についての一考察—保育所保母を対象とした調査結果から—、大阪市立大学生生活科学部紀要、1989、第37巻、p295-307.
- 5) 河村明和、主体的な学びの実践における教育的効果についての検討—学校教育領域の違いに着目して—、早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊、2018、26号、p63-69.
- 6) 佐藤智恵、保育者養成校で学生の持つ保育観に関する研究—取得資格による比較より—幼年教育研究年報、2010、第33巻、p33-39.
- 7) Benner P, The tradition and skill of interpretive phenomenology in studying health, illness, and caring practices, *Interpretive Phenomenology: Embodiment, Caring, and Ethics in Health and Illness*, 1979, p99-127.
- 8) Holloway I, Wheeler S., 質的研究入門研究方法から論文作成まで、1996年、医学書院、p178.
- 9) 厚生労働省「保育所等関連状況取りまとめ（令和3年4月1日）」令和3年8月.

- 10) キャンサースキャン「不適切な保育の未然防止及び発生時の対応についての手引き（令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業）」、令和3年3月.
- 11) 谷川友美、保育実践における倫理—倫理的な保育実践システムの構築を目指して—、別府大学短期大学部紀要、2013年、第32号、p51-60.
- 12) 野島佐由美、倫理的感受性と倫理的意思決定、看護、2003年、55巻、4号、p63-70.
- 13) Pellegrino ED. Toward a virtue-based normative ethics for the health professions. Kennedy Institute of Ethics Journal. Sep 1993, 5, (3) : p253-277.